

東京都地域医療構想調整会議（北多摩南部）における 新病院開設に関する説明資料

令和 7 年 9 月 18 日

社会医療法人社団東京巨樹の会 理事長 蒲池健一

1. はじめに

吉祥寺地域では、病院の閉院が相次ぎ、医療提供体制に深刻な影響が生じています。地域課題の現状と、それを解決するために当法人が取り組む新病院開設計画について説明いたします。

2. 吉祥寺地域の医療課題

1. 病床数の減少と医療空白

- ・2015 年以降、松井外科病院・水口病院・森本病院・吉祥寺南病院と、計 4 つの病院が相次いで閉院・診療休止。
- ・合計 339 床が消失し、特に吉祥寺地域東側を中心に「医療空白」が生じている。
- ・特に吉祥寺南病院の診療休止（127 床）は、地域医療と災害時医療の両面に大きな影響を与えていた。

2. 北多摩南部二次医療圏における病床不足

- ・令和 7 年 4 月 1 日現在の東京都保健医療計画上において、北多摩南部二次保健医療圏は基準病床数 7,512 床に対して 6,860 床と 652 床不足となっている。
- ・また令和 7 年 2 月 14 日開催の同医療圏での地域医療構想調整会議において、2025 年に向けた医療機関の対応方針の確認の報告では、令和 7 年 7 月 1 日予定の急性期機能は、2,115 床に対して必要量 3,087 床で 972 床の不足、また回復期機能においては、同年 7 月 1 日予定で 943 床に対して必要量 2,637 床で 1,694 床の不足と報告がなされている。

これにより、高度急性期から急性期そして回復期への受け皿が不足していると考えており、この受け皿に対応すべく吉祥寺南病院を承継し一日でも早い開院を目指したい。

3. 救急医療体制の空白

- ・吉祥寺南病院は年間 2,300 件の救急受入れ、約 550 件の手術を担っていた。
- ・現在、吉祥寺地域には東京都指定二次救急医療機関が存在しない状況となっており、搬送時間の増加や他院負担の増大が懸念されている。

4. 災害時医療の脆弱化

- ・吉祥寺南病院は「災害拠点連携病院」として位置付けられ、災害時には緊急医療救護所と連携していたが同院の閉院により、中等症者や安定した重症者の受け入れ機能が低下し、災害医療体制に空白が生じている。

5. 感染症対応の課題

- ・コロナ禍では武蔵野赤十字病院のみで感染症対応を担う状況が続き、病床の逼迫が顕著となった。
- ・今後の新興感染症にも対応できる体制が求められている。

3. 新病院開設計画（案）

1. 施設規模と病床数

- ・吉祥寺地域にて過去10年間で失われた病床数（339床）と同規模の300床規模の新病院を開設。
- ・旧病院の敷地（127床）に加え、武蔵野市の協力のもと隣接する吉祥寺コミュニティセンターの移転にて規模を確保。

2. 病床構成と診療機能

- ・高度急性期からの受け皿、二次救急医療としての機能及び在宅復帰へ機能並びに予防医療として・
急性期機能：60床～80床
(二次救急医療を担い、整形外科・脳神経外科・救急科を中心に運営)
- ・回復期機能：220床～240床
(リハビリテーション科を中心に、急性期後から在宅復帰までを支援)
- ・健診事業
(未病のための健診である為、誰でも人間ドック等で利用していただく見込み)

4. 新病院の役割と地域社会への貢献と期待される効果

1. 救急医療の再構築

- ・吉祥寺地域における二次救急医療機関の空白を埋め、24時間365日体制で救急患者を受け入れる。

2. 災害医療の継承と強化

- ・災害拠点連携病院としての機能を引き継ぎ、災害時には行政・医療機関と連携して地域住民の安全を守る。

3. 持続可能な病院運営

- ・上記の機能を果たしつつ地域に根差し、長く市民の命と健康を支える病院を目指すためにも、物価高や建築費の高騰により新病院の建築には多大な費用を要し、健全経営、永続的な経営のためにも300床程度の規模は必要と考える。

5. 今後の展望

- ・地城市民・東京都・武蔵野市・地域医師会・基幹病院と協議を重ね、開設準備を加速
- ・武蔵野市と連携し地域包括ケアシステムの推進を行う
- ・「住民が安心して暮らせる吉祥寺地域」の実現に向けて貢献していく

以上